The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>アナトール・コップ著「都市と革命」 : 1920年代ソヴェートの建築と都市計画
Author(s)	宮島, 久雄
Citation	デザイン理論. 1969, 8, p. 108-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52503
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

アナトール・コップ著
「都市と革命」
—1920年代ソヴェートの建築と都市計画—

Anatole Kopp:
Ville et Révolution ……Architecture et urbanisme soviétiques des années vingt
Editions Anthropos, Paris 1967.

1920年代のソヴェート・ロシアは，革命後のことでもあり，いろいろの制約はあったが，かえって，それが原因ともなって，かずかずの芸術上の実験を試みたということは，よく知られている。しかしながら，これらの諸実験は，のちに共産党の認めるところとはならず，社会主義レアリスムの名のもとに，否定され，それとともに，当時の実験の結果も，現在までほとんど葬り去られてきた。そのために，諸実験を試みたということは，よく知られているにもかゝわらず，その内容についてはまったく知られていないといっても，いいすぎではなかった。

最近になって，1920年代はすでに歴史学の対象となるに及んで，東ドイツやイタリアあるいはイギリスあたりで，この当時の前衛運動を再評価しようとする動きが出て来ており，そうした文献がわれわれの目にもぽつぽつ入るようになってきている。その2，3をあげると，

Mario De Micheli, Le avanguardie artistiche del 900, Schwarz 1959
Vittorio De Feo, URSS architettura 1917－1936, Roma 1963
Camilla Gray, The Great Experiment, Russian Art 1863－1922, London 1962
Sophie Lissitzky-Küppers, El Lissitzky, Dresden 1967
John Berger, Art and Revolution, Ernst Neizvestny and the Role of the Artist in the USSR, Pelican 1969

いまここに紹介するコップの本も，これらに属するものの一冊であるが，現代建築と都市計画の思想の根源が1920年代のソヴェート・ロシアにあるといった歴史的観点からだけではなく，すでに当時の思想は機能主義思想を克服し，社会的集光レンズとして，建築・都市計画のあるべき姿を示していたという点で，現在見なおす必要があると主張するのである。序文を書いているシャン（I. Schein）という人も，「不思議なことに，1967年と1920年代とは一致する」と書いて，「プロレタリア革命は，自ら発展し自分の建築を創造しうる力をもっている」と，暗にのちの社会主義レアリズムの時代の，上からの思想強制を

批判しているように思われる。

このように本書では，建築と都市計画の両方にわたって，1920年代のソヴェート・ロシアの諸実験をあとづけているが，なかでも重点は，OCAと略称される「現代建築家協会」グループの業績を評価することにおかれている。このグループの建築・都市計画が，ソヴェート・ロシアの求める「新しい社会」の「社会的集光レンズ」としての役割を十分にはたすものであり，それと同時に，イワン・レオニドフ（Ivan Leonidov）という「天才」建築家を生んだというのである。レオニドフその人は，プロレタリアートのための建築を主張するVOPRA（プロレタリア建築家協会）から，名ざしで非難された人であったからレオニドフを天才として評価することは，まさしく，著者が，VOPRAの側ではなく，OCAの側にたっていることを示しているといえよう。

こういうふうに書くと，何か著者がOCAの主張を盲目的に信じているように思われるかもしれないが，本書にはそういう不公平さはみられない。コップによると，OCAは，技術の可能性を盲信し，建築を「科学」にし，その芸術的側面のとりあつかいを疎かにしたという。当時なお技術水準の非常に低かったロシアであったから，こういう点はたしかに西洋建築の模倣で，実現性がなく，ユートピア的だとして，非難されたとおりである。しかしと，コップは主張する，OCAグループは，決して政治・経済に無関心ではなかった。彼らは，同じ近代建築派のASNOVA（新建築家協会）がまったく造形的な処理だけに努力したのに対して，建築の社会的問題，さらに社会主義のもとにおける建築問題を才一に考慮したという。すなわち，もし建築にも社会的反映がみられるならば，それは社会変革のための鋳型や道具とならなくてはならない。「新しい社会」の人間は，新しい生活方式をとるべきである。そのためにも，彼は古代の遺物にではなく，新しい住まいに住まなくてはならない。そういう意味で，建築は社会の集光レンズであり，社会主義文化の集光レンズである。コップは，1928年の才1回OCA会議の宣言文に使用された「社会主義文化の集光レンズ」を，このように説明している。

そして，このようなOCAの思想が，彼らの作品（労働者クラブ，宿舎，集産主義のための集団住宅，さらに社会主義国土計画のもとでの都市化計画）に，具体的にあとづけられていることを明らかにしている。著者コップの提供する資料による限り，たしかにOCAグループは全体として，新しい社会主義建設へ向って，建築家としてつまり建築の枠の中で問題を提起し，それの解決に努めていたように思える。また，その限りでは，コップの結論，建築は精密科学ではない，一般規則に帰したり，あるいはマルクス主義原則によって一律に決められるようなものではないという結論は，肯定できると考えられる。くりかえし，「その限りでは」と断ったのは，われわれにはこの本以上の資料がないからである。

こういう結論は，これだけ見ると，西洋近代建築の影響下にあるわれわれには，何か平凡のように思われるかもしれない。しかし，周知のように，少数の例外を除いては，西洋近代建築家といわれる人々は，地味な住宅問題や現実の都市再開発の問題には，手をふれなかった。手をつけようとしても，いろいろな理由で，とくに政治的な理由で，手をつけられなかったといったほうが正確だろうが，現実に置きざりにされていることは事実であ

る。他ときりはなされた，それだけで自足する建築作品の多かった近代建築からの結論と，社会主義的な地味な住宅問題からのそれとが，ほゞ一致するという点にこそ，注目すべきだと思う。

ところで，われわれデザインに関心ある者にとって面白いのは，このOCAグループが構成主義あるいは機能主義と，自ら名のっていることである。普通，構成主義といえば，ガボやペヴスナーの彫刻を通じて知られているが，前記のグレイの著書によれば，彼ら兄弟は，途中から，ロシアにおける構成主義の主流から離れて，ヨーロッパへわたったのであり，これに対してタートリンやロドチェンコらが，構成主義の主流だという。たしかにわれわれにとって興味深いのは，このタートリンやロドチェンコの構成主義の展開であって，彼らは現実の空間のなかのくみたてということを，単なる造形（構成＝コンストラクション）に限らず，実用物をも含めた建設（コンストラクション）にまで拡大し，「生産芸術」を唱えたことである。タートリンやロドチェンコの構成主義は，エル・リシツキーによって，ヨーロッパに伝えられ，ドゥースブルグやモホリ＝ナギのようなヨーロッパ的構成主義者の共鳴をえただけでなく，バウハウスの指導理念にも影響を与えたことは，比較的よく知られているが，ロシアの構成主義がみずからも，実際の生産現場に赴いて，デザイン活動をやったことは，ほとんど知られていなかった。その成果はあまり香しくなく，わずかにグレイやリシツキーの著書にみられる程度であるが，このコップの著書によって，「芸術における構成主義」は「建築における構成主義」すなわちOCAグループにひきつがれていったことがわかったのである。それは例えば，1922年に『構成主義芸術論』を著したアレクセイ・ガンは，1920年代の後半には，OCAグループの雑誌『ＡＣ（現代建築）』誌上で，構成主義論を発表していることからもわかるし，OCAグループの主要メンバーであるヴェスニン兄弟のアレクサンドルは，タートリンの弟子であることからも推定される。

OCAグループに対する批判のひとつに，それが形式主義だというのがあったが，コップは，OCAグループの構成主義という名がそういう批判を許したのだといっている。しかし，これは明らかに，先ほどの建築は科学ではないという立場と矛盾する主張であって，OCAグループはやはり自ら名のっているように，「構成主義」をひきつぐものであると考えるほうが正しい。ただし，コップのいうように，OCAの構成主義は，たしかに1911年のマーレヴィッチ，ペヴスナー，ガボの宣言とは同じではない（1911年という年にこのような宣言は発せられていないようだ。コップの構成主義についての知識は，かなりあやしい。しかし，ここではガボ，ペヴスナーの現実主義(レアリスム)宣言と同じではないという意味では，まずうなづける。)。それには当然，芸術における構成主義 → 生産主義 → 建築における構成主義という展開を考えなくてはならないと考える。

本書は，なるほど構成主義の，このような展開そのものをテーマとするものではないが，このような事実上の間違い（恐らくこれは否定できないと思う）があるということは，他の点での主張の根拠の正しさに対してやゝ不安があることでもある。著者コップは，アカデミックな歴史学者ではなく，建築家であるというから，このことはまず仕方のないことかもしれない。ただ，OCAグループの評価そのものの方向は，細かな論証は別にしても，

十分肯定できるように思われるし，本書の主眼点もここにあることは，前述したとおりである。

いずれにしろ，また構成主義関係の研究書がひとつ増え，デザインと現実，政治，社会との関係に，アクチュアルな観点を示してくれたことは，高く評価したいのである。

279頁　図版1103

大阪芸術大学　宮島久雄

彫塑材料
合成樹脂
成型材料

睦石膏は……
井上顔料株式会社

三十三間堂電停前　電 ㊺ 3142・6236